

アリエフ メヘリバン  
 ユネスコ親善大使 ヘイダル・アリエフ財団、会長

# ムガム (伝統音楽) の一流派 としてのカラバフ (KARABAKH) 派

ユネスコの決定により、アゼルバイジャンに伝わるムガムが、口承無形遺産に指定された。アゼルバイジャンの人々にとって文化的な基盤となる価値の体系を形成する一つよう要素として見なされるムガムについての今回の決定は、この部門での卓越した代表例としての真価が認められたことを意味し、世界の文化的なコミュニティがこの固有の遺産に目を向けるように促すことを意図するものである。

数世紀にも及ぶ歴史を有するムガムは、数々の歴史家が東洋のルネッサンス（文芸復興期）と呼ぶ時代にその最も華やかな時代を迎えた。この時代には、ギリシャ・ローマ時代の遺産を基礎に、アゼルバイジャンの文化は文学から建築までに至る数々の分野で、多くの傑作が生まれた。その後、

ムガムは発展を遂げるが、その本質と重要性は変わることがなかった。ムガムは、一方で過去の遺産として、他方でとても近代的な芸術として、文化的な小宇宙を形成し続けている。この芸術が持つ厳格な規範は、主題の即興性と創造的な展開と絶妙に融合するのである。

この高い独自性を誇るムガムという芸術は、豊かな哲学的、音楽的、および文芸的な基盤の上で進化を遂げた。聴き手の目はしばしば、ムガムの音楽の演奏者たちが、あたかも古代から数世代にわたり受け継いできた魔術を体得した者のように映る。この音楽を聴く者は、永遠の真理に触れ、



心の平穏を得る機会を手にするのだ。

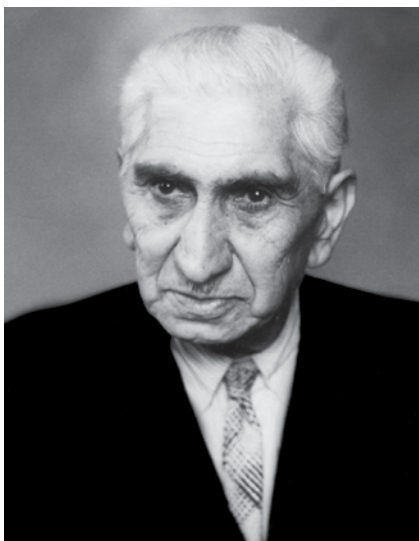
いかなる学術書をもってしても、この生きた芸術の脈動を生き生きと伝えることはできない。人智を越えた神秘学を体得した者として、ムガムの演奏者たちは、演奏を通して伝えられるいつまでも新鮮で生命力に満ちた音楽と詩の世界を披露す

ることができるのである。ムガムは、寓意と象徴に満ちたアゼルバイジャンの伝統的な詩を基盤とし、これと融合した芸術である。寓意には、神秘的な意味が隠されている。すべての詩的表現の背景とその意味は、東洋の哲学、象徴を使った言語、および婉曲的な表現に精通する者のみによ

り理解され、そうした知識を通して詩的な表現に隠された意味を読み解くことができるのだ。ムガムの発祥当初から、演奏家たちはガザルの中で広く用いられる韻律形式の中で陶醉するように音楽を作り出す。自分が暗誦できるガザルの数を具体的に言えるムガムの演奏家はいない。しかし彼ら



ジャバル・ガルヤグディ



セイード・シュシンスキ



ビュルビュル



サヂヘジャン



ハーン・シュシンスキ

は、ある主題に向き合うと、それに因んだ詩をいくつも諳んじることができるのである。

アゼルバイジャンの作曲家にとって、ムガムは今も昔も決して枯渇することのないインスピレーションの源となっている。クラシック音楽を基盤に創作された交響乐的

なムガムを、世界の数々の交響楽団が演奏し、大きな成功を収めている。同時に、近代の作曲家にとって、ムガムは今も無限の可能性を秘めた探求と表現の宝庫となっている。ムガムをよく知る者であれば、本来のムガムの音楽とは異なる編成で演奏されても、その中に

ムガム的なものを「聴き取る」ことができるのである。

ムガムには独唱曲と楽器の伴奏が入るものがあるが、これらいずれの形式もアゼルバイジャンでは広く演奏されている。楽器のみでムガムを演奏する楽団は異なる編成を持つ場合があるが、こうした楽団は通常、伴奏を目的とした楽団よりも規模が大きい。楽器で演奏するムガムには多様性と円熟した味わいがあるが、その対極にあるのが独唱曲としてのムガムであるとされる。独唱曲であればこそ、聴き手はその中に「アストラル界への旅」というイスラム神秘主義の精神を見出すことができるのである。この「アストラル界への



旅」という概念は、ムガムの専門家によると、この音楽が持つ瞑想的な本質を形成しているという。

ムガムの歌手たちは、アゼルバイジャンでは本来、Khanendeと呼ばれる。Khanendeは楽器による伴奏に合わせて歌うことが多い。民族楽器の演奏家で構成する楽団の規模は、三重奏（タール（弦楽器）、カマンチャ（弓奏楽器）、デフ（膜鳴楽器））の楽団から大編成の楽団に至るまで様々である。

アゼルバイジャンで活躍するムガムの歌手は、現在認知されている複数の流派のいずれかに属している。このジャンルの音楽は国中で広く演奏されているが、複数存在するムガムの流派が生まれた中心地はバクー、シェマハ、ガンジャ、ナフチバン、およびシューシャである。カラバフ（Karabakh）派と呼ばれる、特に関心の高いこのムガムの流派は、主にシューシャで発展した。アゼルバイジャンのムガムを記録した最初のレコ

ードは、1902年に登場している。アゼルバイジャンのムガムの音声を最初に記録したのは、英国の「Gramophone」、ドイツの「Sport-record」、およびフランスの「Pate Records」といったレコード会社である。1913年以降、これらの企業はリガ、モスクワ、ワルシャワ、サンクトペテルブルク、キエフ、トビリシ、およびバクーに駐在員の事務所を次々と開設している。アゼルバイジャンのムガムは、ロシアの「Concert-



高名なタール（弦楽器）奏者、Mirza Sadikhが率いていた楽団

record」、「Monarch-record」、「Extraphone」、「Gramophone-record」、およびハンガリーの「Premier-record」といったレコード会社によっても録音が残されている。ソ連時代には、アプレフカ（Aprelevka）とノギン（Nogin）の音響生成工場が貴重なレコードを発売している。

これらのレコードの多くは、アゼルバイジャンの国立音響記録所蔵庫に保管されている。また、アゼルバイジャン音楽文化博物館にもこうしたレコードが所蔵されている。さらに英国の図書館にも、ア

ゼルバイジャンのムガムを収録した古いレコードが保管されている。アゼルバイジャンでは、古いレコードを復元するために多大な努力が払われた。例えば、20世紀初頭のレコードをデジタル形式に変換する作業が行われている。それらのレコードはこれまでに一般に発売されたことはなく、頒布を目的としていないため製造されたのは一枚ずつとなっている。第一次大戦による政治的な大変動、ロシア帝国の崩壊、およびソビエト連邦の樹立により、音楽の

一つのジャンルとしてのムガムは深刻な危機にさらされた。ソビエト連邦の基盤となる社会主義のイデオロギーでは、この音楽が労働者階級とは無縁な時代遅れの芸術であると見なされた。ムガムの演奏で主導的な役割を果たすタール（弦楽器）でさえも、攻撃を免れ得なかった。当時、この音楽は表舞台から去ることを余儀なくされたが、再び一つの文化として復権を果たす日がやってくるのだった。しかし、カラバフ派のムガムを演奏



する名手たちの演奏が良質なスタジオ録音のレコードとして登場するようになるのは、1930年代から1950年代にかけてであった。これらのレコードには、Khan Shushinskiy、Zulfi Adigezalov、Seyid Shushinskiy、Abulfat Aliyev、Mutallim Mutallimov、Yagub Mamedov、Islam Rzayev、Arif Babayev、Murshud Mamedov、Gadir Rustamov、Suleyman Abdullayevの歌声が収録されている。

最終的に、20世紀の末になって第三の集団の演奏家たちが認知されるようになった。代表的なのは、Vahid Abdullayev、Sakhavet Mamedov、Zahid Guliyev、Garakhan Behbudov、Mansum Ibrahimov、Sabir Abdullayev、Fehrüz Mamedovといった Khanende（歌手）たちである。才能ある人物の誕生に備えて、人は数世紀にもわたって準備を整えなければならないと言われる。才能ある者が誕生するま

で、その者が耳にする子守唄が作られ、その者に善悪を教えるおとぎ話が作られ、その者が祖先の残した遺産を引き継ぐ道に入るきっかけとなる歌が存在しなければならない。一つだけ確実なことがある。それは、才能がある者の周囲にいる者たち、および彼を取り囲む環境がその者の存在を見出すことができる状態になれば、その者は自分自身の才能に気づくこともなく、また周囲がそれを指摘することもなく一生を終えてしまうであろう。こうした視点

に立てば、カラバフ派のKhanende（歌手）たちは幸運にも、彼らを迎え入れる環境が整った場所と時代に生まれたものといえる。

彼らはカラバフで生を受けたことで、自分たちの運命が概ね決まってしまった。彼らは、歌い、歌声の良さを認識し、音楽の才能を見出すことができる者たちが多く暮らす場所に生を受けたのであった。北部のシューシャであるか、南部のアグダムであるかを問わず、カラバフで生まれた者はムガムに精通し、そこに伝わるいずれかの伝統的な歌を歌うことができたのであった。ムガムは、人の魂を形成

すると信じられている。カラバフでは、音楽を含む美的なるものに敏感に感応する魂が自然によって形成されるプロセスが連鎖的に作用していたのである。これらの場所が持つ美しさと調和は、カラバフ出身のあらゆる演奏家が長年にわたり培った独特な音楽文化の中に反映されている。

カラバフの多くのKhanende（歌手）はシューシャの出身者である。シューシャに関するテーマ、すなわち難攻不落の要塞と精神的な拠り所、アゼルバイジャンの人々の文化的な聖地としてのイメージが、常に彼らの作品の主題となってきた。

シューシャの出身者であれば誰でも、その地の歴史に精通していた。しかし、そうした知識はただ単に出来事が年代順に並べられた歴史書から得られたものではなかった。「カラバフの物語」

— Karabakhname — は、単に手書きの書物として残されている研究書として見なされているだけではない。そこに書かれている話は、過去から現在までに至る彼らの生活そのものを綴った記録なのである。この記録の中に書かれている数々の歴史的な出来事は、いつの時代も語り継がれ、複数の世代を経て今に伝えられてきた。このようにして、歴史的に起きた出来事が克明に記録されてきたのである。Karabakhnameとは、日常の生活、記念建造物、過去の歴史的な真実と現在がお互いに調和して補完しあう現実の中に反映される生きた歴史書であった。こうした場所の歴史と自然が、カラバフ派というムガムが扱う主要な主題の一つを生み出した。よく知られた「Karabakh shikestesii」というムガムは、昔も今も、カラバフ出身の歌手

ハーン・シュシンスキの楽団。左から、ハーン・シュシンスキ、バフラム・マンシロフ、タラット・バキハノフ



が名刺代わりに歌う曲である。

シューシャからは数多くの音楽家が世に出ているが、彼らの多くは、ロシアの詩人、セルゲイ・エセーニンの詩の有名な、「詩人でなければ、シラズの出身者にあらず。歌手でなければ、シューシャの出身者にあらず」という一節に合わせてShushinkiyの芸名を好んで使っている。

シューシャからは、芸能に関する百科事典を編纂できるほどの数多くの著名な歌手、作曲家、および演奏家が世に出ている。

シューシャはいつの時代も、東洋の音楽教育の場として正当に評価されてきた。この地には著名な歌手の歌声を聴くこと、あるいは歌を学ぶことを目的にあらゆる場所から人々が集まっている。この町は、数多くの音楽家がいることだけで有名になったのではない。シューシャ的なるものは、この地が誇る独特の自然環境や地元の人々の行いによって形成されたのである。この地には様々な背景を持つ卓越した人々が生まれ、彼らが作った楽器、彼らが建て



たホール、また彼らが書いた優れた詩を通して数々の音楽が生まれたのである。この町が持つ雰囲気は、アレクサンドル・デュマがコーカサス地方への旅を題材に著した作品の中に描写されている。この作品には、カラバフ出身の女流詩人Natavanに関する印象的な記述がある。

清らかで透明な泉の存在が、シューシャを特別な場所になっている。中でも最もよく知られたIsa Bulagは、シューシャを象徴する存在と言われている。空高くそびえる山々が美しい高原を取り囲み、優れた音響効果を持つ固有の屋外ホールを形作っている。Jidir Duzu高原では、数多くの著名

な歌手たちが腕前を披露してきた。シューシャの少年たちが自然の神秘と戯れる一方、ムガムを体得し始めている彼らの声は山道を伝い、山にぶつかり鳴り響いたのかも知れない。泉のささやきや木々の音で増幅され、鳥のさえずりをバックに促したこの独特なポリフォニー（多声音楽）は、子どもが思い描く空想の世界から生まれたのかも知れない。

1987年、Kharibulbul国際ムガム音楽祭がこの地で開催された。この音楽祭の名称は、この地の山々に咲く花に因んで付けられた。この音楽祭では、豊かな才能を持つ多くの若者が自分たちの実力を披露した。1992年



に、シューシャはアルメニア人の侵略を受けたため、こうしたムガムの将来のスターたちは難民となった。現在、難民キャンプで生活している彼らは、残念なことに生まれ故郷から追い払われてから一度も歌う機会を与えられていないという。「山で生まれた私たちは、谷底で暮らしたり、歌うことはできないのです。私たちの魂はいつもシューシャにあります。Jidir Duzuの山の泉もなく、新鮮な山の空気もなく、鳥のさえずりもなく、私たちはどのようにして歌えばよいのでしょうか？」果たして、この問いに対する答えはあるのか？子どもたちが感じている絶望感を前にして、人はただ困惑するだけである。

慣習法によれば、シュ

イスマイル・ママドフ 演奏家



ーシャでは音楽会がいくつかの等級に分けられて行われてきた。一つはマジリス (majlises) で、この音楽会には一流の音楽家が招かれていた。特に、過去に知られていなかった詩に基づく歌が披露されていた。音楽の質が高いことを条件に、歌手は過去の文献から詩を見つけたり、あるいは近代の詩を拝借することもできた。このような音楽会で、舞曲が披露されることはなかったが、ムガムはあらゆるニュアンスを付して披露された。

その下の等級のマジリス (majlises) には、技術的にやや劣る音楽家たちが招かれた。この音楽会でもムガムが披露されたが、二時間も経つと民俗音楽が演奏されて、聴

衆は踊ることが許されたのだった。さらにその下の等級のマジリス (majlises) には、純粹に音楽を楽しみたい人たちが集まった。この等級の音楽会は、厳粛な音楽の演奏を意図しておらず、自尊心のあるKhanende (歌手) たちは参加を回避した。

こうした等級分けは、状況により異なるが、こうした音楽会是一流の音楽家が高い水準の演奏技術を維持するための機会として長年にわたり与えられてきた。聴き手にも同様のことが言える。要するに、ムガムを本当に理解する人たちの音楽会が開かれることで、この音楽が民俗芸能として発展し続けることができたのである。

作家のAbdurahim Hagverdiyevは、19世紀後半にバクー、シェマハ、アシュハバード、テヘラン、またはイスタンブールで出会う音楽家たちの中には、間違いなくシューシャの出身者がいる。彼らは東洋で一定の音楽形態を作り出した人々で、自分の歌声や才能を評価してもらいたい人たちは必ずシューシャに向かった。数

年経過した後、Khanende（歌手）として認められると、彼らはHajiseyn、Sadikhjan、Mirza Mukhtar、Jabbar Garyagdioglu、またはカラバフ派ムガムのその他の名人から受けた評価を引き合いに出すのだった。

アゼルバイジャンで起きた最初の石油ブームにより、ムガムの芸術としての発展が遅れることになった。バクーの石油界の実業家たちにより組織されたEastern Parties（東部グループ）は大きな成功を手にした。最初のコンサートはシューシャの劇場で行われた。伝統的なムガムの音楽会が大衆的なコンサートへと様変わりし始めるきっかけをもたらしたのがEastern Partiesの存在であった。

20世紀において、ムガムのカラバフ派は著明な音楽家を数多く世に送り出した。ナゴルノとカラバフの間で紛争が起きたとき、Khanende（歌手）の手配をめぐり一貫性が失われた。銃の音が鳴り響くとき、芸術の神は押し黙ってしまうという格言がある。しかし、カラバフのKhanende（歌手）たちは黙っていない。彼らは歌う。だが、彼らの

歌声には苦悩、悲しみ、苦痛が満ちている。偉大なるJabbar Garyagdiogluがかつて言ったように、「たとえ私が天国にいようとも、カラバフがないのであれば一切の価値はない」のである。

急速にグローバル化が進むこの世界で、変化は他にも起きている。以前には見られなかった規模の人の往来、一瞬にして伝達される情報、世界の様相を様変わりさせる新しい技術 — こうした現象はすべて、日増しに高まるテロリズムと自然災害の脅威を背景として起きているのである。こうした影響に対して脆弱な世界において、ひとり人間は一粒の米粒のごとく小さいものである。グローバル主義であっても、反グローバル主義であっても、失われてしまった調和を取り戻すことはできない。しかし、こうしたときだからこそ、私たちは伝統と深く結び付いた将来の発展に向けて礎を築かなければならないのである。それぞれの文明が持つ伝統と、すべての人々が持つ文化を保護することによってのみ、私たちは文化的多様性を実現することができ



エルトラン  
演奏家

るのである。すなわち、文化が保護されて豊かになる世界を実現できるのである。これが、ユネスコの無形文化遺産の保護に関する条約が掲げる目標である。◆